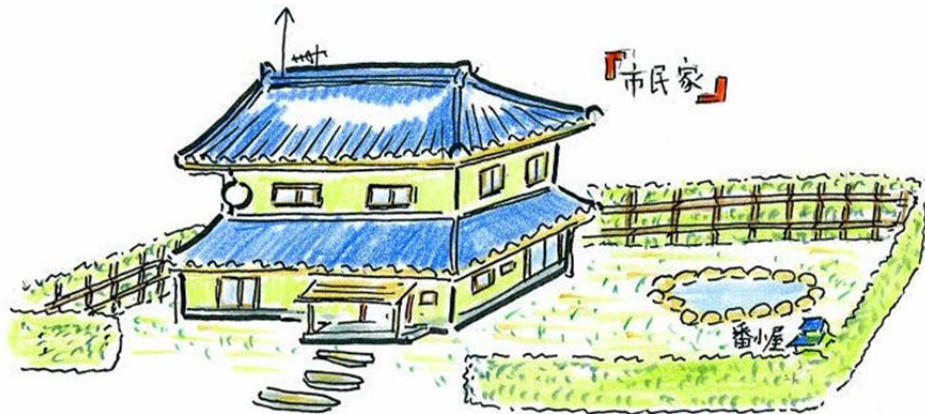


◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆ これまでのあらすじ

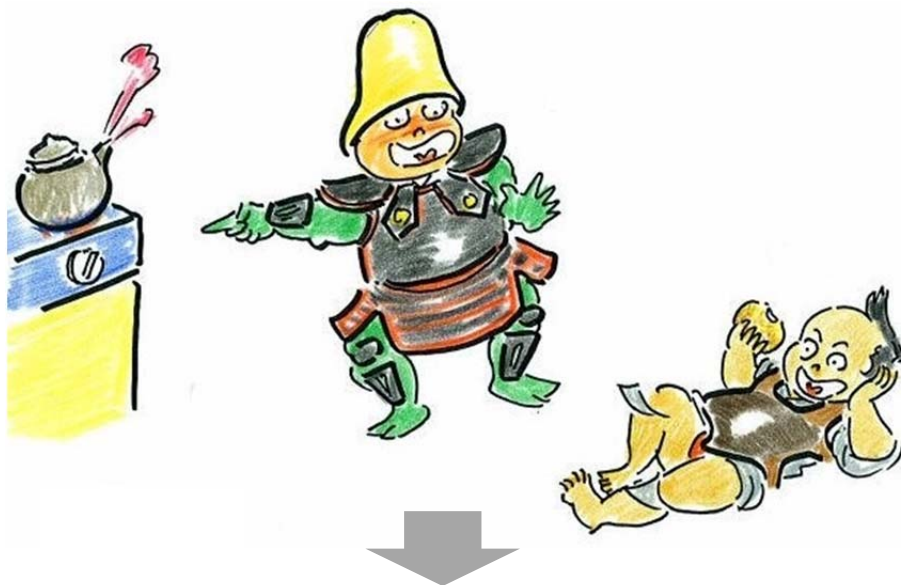
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。





そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！



援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

主な登場人物



援ちゃん 5歳



支援くん



ご助 (中間)

姫さまっ



ミーちゃん (飼い猫)



ママ



パパ



閻魔様

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.29

「旦那様、お隣の『宮下さま』んとこの一平さんいらっしゃるじゃねえですか。」とお屋敷の点検中、ご助が話しかけてまいりましたな。

「ああ？おお、おいでるな。確か、短大を卒業して今月から社会人じゃったな。その一平さんがどうかしたのか？」と尋ねると



「先週、誕生日だったって、宮下んとこのご助が言ってやしたんでね。」と
いうご助に

「ほお、もうそんなになるか。で、お前は宮下殿のところのご助と話すこと
があるのかい？」と拙者が聞くと

「い、いえね、話すってゆうか、これでさ。」とご助は言いながら麻雀パイを
倒す仕草をしてみせたのじゃ。

「ああ、卓球か。」と答える拙者に

「ど、どうしたらこれが卓球になるんですかい？こ、これですよ、これ、『ロ
ン』って・・・」と言いながら麻雀パイを倒す仕草を繰り返すご助に



「ははは、分かっておる。ババ抜きじゃな？」と答えるとご助の奴、

「ば、馬鹿じゃねえんですかい？こうやったら全部見えちゃうでしょ。ババもみんな見えちゃうじゃねえんですかい。麻雀ですよ、まーじゃん！」と自分から答えをゆうてしまいおって、詰まん奴じゃのおと思ったのじゃった。



「ふーん、麻雀かい。それで一平さんの誕生日が何の関係があるのじゃ？」

と拙者は気のない返事をしたのじゃった。

「い、いえね、あの一平さん。二十歳になるんですよ。二十歳。」

「そりゃあそうじゃろ。去年19歳じゃったからな。二十歳を乗り越して22歳になる人がいたら見てみたいものじゃ。」と拙者。

「ちゃ、茶化さないでくだせえよ。二十歳と言えば大人ざんしょ？」とご助

「う・・・ん、最近は選挙権やら少年法の適用やらが引き下げられ、大人の概念は18歳とも言うからな。」と応じると

「い、いやいやいや、あっしが言いたいのは・・・」というご助を遮り

「ははは、みなまで言うな。ご助が言いたいのは飲酒や喫煙が許される・・・

ということじゃな？」と言うと

「酷えな旦那様、あっしが言いたいこと分かってらしたんじゃねえですか。」

と言うので



「ははは、20歳になった一平様がタバコでも吸い始めたのかい？」と話を

向けると

「そ、そうなんでやすよ。一平様にはあっし達の姿は見えないじゃねえですか。麻雀してる側で、フー、プカァー・・・フー、プカァーってやられちゃ気が散っていけやせんや。それでなくてもあっしは寝たばこで番小屋を燃やしちまってから一切タバコは吸っていやせんからね・・・」とまくしたてるご助に

「偉いではないか。禁煙を守って感心、感心。」と褒めてやったのじゃが

「い、いえね、あっしは・・・その、も、もう禁煙の刑は・・・と、解いて・・・」

と小声になるご助に

「ご助よ。番小屋を焼失させた恥ずかしさを忘れたのか？姫様の機転がなければ主様のお屋敷まで燃やしてしまうところじゃったことを忘れたのかい？」

と拙者が言うと

「わ、分かっております・・・分かっておりますよお・・・」と頭を下げる

ご助に

「いましばらく禁煙に努めるがよい。頃合いを見てから許してつかわすほどに。」と話を切り上げたのじゃった。

その夜、宮下家は一平の居室。

4月とはいえ夜の冷え込みがまだまだ強いなか、市民、宮下、隣の後藤、そのまた隣の前、4家のご助が集まり炬燵を囲んで麻雀が始まっていた。

「ご助、やらんか。」と後藤家のご助が宮下家のご助に酒を勧めた。

「おおすまんの、ご助もどうじゃ？」と宮下家のご助が前家のご助に・・・

「おっととと・・・ご助もやれや」と前家のご助が市民家のご助に・・・

訳が分からなくなるが、とにかく4人のご助が酒を酌み交わしながら麻雀をしておったのじゃった。

そしてベッドの上では、この部屋の主の一平様が飲みなれないビールを飲みながら、やはり喫いつけないタバコを時々 『ごほほ、ごほほ』 とせき込みながら

「や、やっと酒もタバコも解禁だということになーんも美味くないや。」と愚痴られておった。



時折流れてくる一平様のタバコの煙にヒクヒクと鼻をうごめかせながらご助は

「ああ、いい香りじゃのお、お主らはタバコはせんのかい？」と他家のご助

たちに聞いたのじゃが、全員

「ありゃあ火事の危険があるから儂はやらん。こっち（酒）専門じゃ。」と

言いながら、左手のグラスをあげてみせたのじゃった。



『チッ、話の合わねえ奴らよ。』とご助は舌打ちしながら一平の吐き出す煙

に酔いしれながら手牌の中から『中』を放出したのじゃ。

途端に、上家の親の後藤と対面の宮下が『ローン』と大声をあげ、牌を倒した。

「で、出たあ！ 大三元じゃ。親の役満じゃ」と喜ぶ後藤に

「す、すっげー、最後の1枚じゃんか。俺のは国士無双の13面待ちだぜ！

W役満だ！！」と宮下・・・。



「お、終わった……。親の役満に加え、子のW役満……。み、みんなあ奴のせいじゃああ。」と一平をにらみつけたご助は

「あ、ああ、大変じゃ！」と叫んだ。



ご助が指さす先では、飲みなれないビールに酔い、眠り込んだ一平の指からタバコが転げ落ち、ベッドを焦がし始めていたのじゃった。

「み、みんな、あのビールをタバコに掛けるんじゃあ」とご助は炬燵を飛び出すと、他家のご助もそれに続いたのじゃ。

やがて、4家のご助の活躍によってベッドのタバコ火は消し止められ、ビールの冷たさに目覚めた一平は

「ああっ大変だ！もう少しで火事になるところだった！！ ビールが掛ったんだな。もしもビールがなかったら火傷するところだ・・・危なかったなあ・・・」
と言うとベッドのタバコの吸い殻を片付け始め「タバコもビールもまだいらないや。その前にもっと人生経験を積まなくっちゃ。それともう、寝たばこは絶対にしないぞ。」と固く心に誓ったのじゃった。

ご助は、額を流れる汗を腕で拭いながら、一平の誓いの言葉を聞き

『やれやれ、俺ももう一度、誓いなおさないといかんのお』と改めて思うのじゃった。

そんなご助の耳に

「ああっ？ わ、俺の役満が・・・大三元があ！？」

「おおお、何じゃ？俺の国士無双も壊れておる！？」

と、後藤と宮下のご助が騒ぐ声が聞こえてきたのじゃ。

ご助は聞こえぬふりをしながら

『炬燵を飛び出すとき卓を蹴ったのじゃが・・・う、上手くいったようじゃな。』と

敵に後ろを見せ、ほくそ笑むのじゃった。



(おわり)